

原著 (Article)

青年期以降の自閉症スペクトラム障害と未診断事例

**Autism Spectrum Disorders from Adolescence to
Adult Periods and Pre-Diagnosed Cases**

宮川 充司
Miyakawa, Juji*

要 旨

成人期の発達障害を巡り、未診断事例と診断除外例、自閉症からアスペルガー症候群、犯罪加害者といった成人の発達障害を巡る最近の関心事項を論じた。

キーワード：自閉症スペクトラム障害、アスペルガー症候群、成人期の未診断事例

Key Words : Autism Spectrum Disorders, Asperger Syndrome, adult pre-diagnosed cases

主文

被告人を懲役 20 年に処する。

未決勾留日数中 210 日をその刑に算入する。

押収してある文化包丁様の刃 1 個（平成 24 年押第 104 号符号 1）及び

文化包丁様の柄 1 個（同号符号 2）を没収する。

（平成 24 年 7 月 30 日大阪地裁判決 判決要旨主文から）

いきなり裁判所の判決主文から稿を起すが、上記は 2012 年 7 月 31 日付の各紙で一斉に報道された裁判員裁判による大阪地裁の殺人事件の判決主文の一部である。¹⁾²⁾ ちょうどロンドンオリンピック開催中で、マスコミ報道もオリンピックと金メダル一辺倒で、この事件の報道に気づいた人はごく限られた関心事項の人間のみであったかもしれない。

この事件は、前年の 7 月 25 日に大阪市で起こった事件で、当時 42 歳の引きこもりで、精神鑑定の結果によりアスペルガー症候群と鑑定された男性が、自宅で姉を刺殺した裁判員裁判の判決で、検察側の求刑懲役 16 年をはるかに上回る懲役 20 年の判決がなされたものである。この事件の被告は、各紙の報道内容や判決要旨によると、この事件の被告は小学校 5 年生の途中から不登校となり、約 30 年間のほとんどを、自宅で引きこもる生活を送ってきた男性で、生活の面倒を見てきた実姉が自宅を訪れた際、一般には理解しにくい逆恨み的な動機により実姉を刃物で殺害したという何とも痛ましい事件である。判決要旨によると、「この事件の被告人は、25、26 歳の頃漠然

と自殺を考え、34歳の頃、インターネットで自殺の方法を調べようと思い、姉にパソコンを買ってほしいと頼むようになった。姉が中古のパソコンを買って与えると、他人が触ったものに触れるのがいやだった被告人が、このことにより、姉に対する恨みが深くなった。(事件が起こった年の)平成23年6月に母親に暴力をふるって怪我をさせたので、姉が母親を施設に入れた。その後、姉が生活用品を届けていたが、被告人の自立を願って書き置きを残したが、姉が自分のことを助けるつもりがなく、報復してきたと受け止め、刺し殺そうと考え、文化包丁様のものを自室に持ち込み、犯行に備えた。」とされている²⁾。

裁判員制度による裁判の特徴として、検察が求刑した16年の量刑を裁判所の判断で、それを上回る量刑を科した理由は、①被害者遺族の処罰心情が極めて重いこと、②アスペルガー症候群であるために殺人の動機が通常人の理解できないものであるが、量刑の軽減する理由にはならないこと、③犯行の様態が執拗かつ残忍であること、④十分な反省に至っていないこと、⑤アスペルガー症候群に対する社会の受け皿が用意されていないので再犯の恐れがあるので、できる限り長期間刑務所に収容し内省を深めさせる必要があるといった理由が判決要旨に列挙されている。これらの判決理由のうち、①は犯罪被害者の処罰感情を判決で考慮するという、近年の裁判の傾向から十分理解できるものの、②以降の理由が諸団体からの批判の対象となった。

この判決についての各報道記事は、一斉にこの裁判員裁判による量刑の特異性を報道した。また、日本自閉症協会 (<http://www.autism.or.jp>)、日本発達障害ネットワーク (<http://jddnet.jp>) といった発達障害や精神疾患の支援団体は、発達障害やその支援についての理解が大きく実情から逸脱していること、あるいは日本弁護士連合会といった法曹関係の団体も web サイト等を通じて、保安処分に匹敵する障害者差別であるといった観点から、一斉に非難表明をしている (http://www.nichibenren.or.jp/activity/document/statement/year/2012/120810_3.html)。

日本自閉症協会は、2012年8月8日付の「アスペルガー症候群を有するとされる被告人に対する大阪地方裁判所の判決に関する緊急声明」により、上記の④と⑤の判決理由について、「被告人が十分な反省に至っていないという認定が正しい認定かどうか疑問である。アスペルガー症候群であるから反省ができないというのは医学的根拠がない。社会的受け皿は社会が提供するものであり、平成17年の発達障害者支援法の施行により、発達障害者支援センターが設置され、平成21年以降矯正施設などからの退所者への支援として地域生活定着支援センターが設置され、未だ十分ではないが、受け皿は徐々にではあるが整いつつある。不登校を放置したのは教育行政の責任であり、被告人に転嫁し厳罰とすべきではない。アスペルガー症候群に対する誤った認識を基に、許される限り長期間刑務所に収容することが社会的秩序の維持に資するというのは、障害に対する差別的判決といわざるをえない。」という主旨の声明を発表している。

日本発達障害ネットワークは、2012年8月13日付で公表した「アスペルガー症候

群の被告人に対する大阪地裁の判決について」の声明文で、①障害を理由にして量刑を重くするのは障害者差別ではないか、②アスペルガー症候群という発達障害を正しく理解した上での判決か、③社会的受け皿が用意されていないというのは、矯正施設退所者に対する地域生活定着支援センター等の福祉サービスや社会的支援について認識不足ではないか、といった論点から、批判的な声明を行っている。

量刑（懲役 20 年の実刑判決）判断の妥当性については、この事件は控訴されており、上級裁判所での判断となるので、その裁判の行方を見守るとして、この事件と大阪地裁の判決とその被告人について、発達障害研究の視点から、若干の検討を加えたい。

まず、この事件の被告人について、精神鑑定がなされ、その鑑定によりアスペルガー症候群という鑑定結果を裁判所が認定したという点である。高岡（2009）や藤川（2010）、杉山（2007, 2011）、宮川（2011a, 2011b, 2012）が論じたように、犯行動機の一般的理解が困難な殺人といった特異な少年犯罪の加害者の中に、広汎性発達障害・アスペルガー症候群といった自閉症スペクトラム障害が鑑別されることは、少年審判では必ずしも希な事例とはいえない。

しかし、成人犯罪者の精神鑑定に、知的障害以外の発達障害の鑑定結果が提出され、それが認定されたのは、成人事件としては比較的新しい鑑定結果といえるのではないだろうか。なぜならば、成人犯罪者についての精神鑑定は、成人専門の精神科医に鑑定依頼がなされる。成人専門の精神科医は、必ずしも成人の発達障害についての診断経験や枠組を持っているとは限らない。発達障害を有し、適切な発達支援がなされなかった場合、複雑な二次障害や併存症等で複雑化していき、発達障害そのものが表面的には目立たなくなっている場合も少なくない。また、成人犯罪の場合、犯罪の背後に発達障害の存在があったとしても、そのことが見逃され、パーソナリティ障害その他のものとして鑑定されてしまうことがあったとしても、大きな争点とはならないからであろう。成人の重大犯罪の場合、刑法第三十九条の「心神喪失及び心神耗弱」の規定により責任能力が問えるかどうか精神鑑定の関心事項で、それに該当する統合失調症や知的障害以外は、あまり重要な関心事項ではないからと考えられる。

ただし、この事件の公判では、表面症状が約 30 年もの長期にわたる引きこもりと親族への殺人行為が主たる特徴である成人の被告人について、症状の背後に通常は見逃されてもおかしくないアスペルガー症候群という発達障害の存在が鑑定医により指摘され、それが裁判所により認定された点は精神鑑定技術の進歩といえるかもしれない。治療的アプローチを伴わない精神鑑定の手続きで、成人犯罪者についての一連の犯罪行為や特異な行動特徴から、背後にある発達障害の存在についての洞察は、もっぱら鑑定医の高度な鑑定技術に依存していると考えられるからである。ただし、その鑑定結果が、裁判員裁判の特徴により、量刑をより重くする理由になったとするなら、裁判員裁判の制度的な問題を含めて、十分な論議を尽くすべきだろう。

この事件の精神鑑定で鑑定医によるアスペルガー症候群という鑑定結果であるが、

どの時点からの診断かは、新聞報道内容や判決要旨を見ても判然としない。その事件を起こす以前から、その事件の加害者について家族や社会がある程度認識していたが適切な対応がなされなかった結果なのか、あるいはアスペルガー症候群という発達障害については、周囲で全く認識のないまま、二次障害として生じた不登校から引きこもりと重症化していき、社会的な支援もなく見逃され続けたのか、その精神鑑定が行われるまでは全くの未診断事例であったのか、明確に判断できる情報を欠いている。しかし、この年代層からいえば後者である可能性は十分高い。

このアスペルガー症候群の特徴を理解している発達障害関係の臨床医や研究者の視点から言えば、少年事件の場合、こうした発達障害についての鑑別結果は、更正を前提とした適正な処遇のための重要な判断材料となるはずであるが、成人の場合、それが考慮されないどころか、量刑を重くするための根拠に使われたところが、この障害の特性から考えると何とも不合理な裁定と言わざるをえない。また、この事件について、知人の元裁判所関係者に参考意見を求めたところ³⁾、「裁判員裁判では、裁判所と訴訟関係人との間であらかじめ争点及び証拠整理手続きを経た後に裁判員が選任されることになっている。裁判員に選任された者と合議体の裁判官は、①事実の認定、②法令の適用、③刑の量刑について合議することとされており、評議合議の内容は漏らしてはならないとされている。そのため、裁判員と裁判官の間で、どのような意思形成がなされたかについて、伝わりにくいところがあり、疑問が残ったのではないかなと思われる。しかし、特に裁判員裁判の場合は『見て、聞いて、分かる』証拠調べをすることになっているので、公判廷では裁判員はもとより傍聴者には十分に納得されるように工夫がなされていたのではないだろうか。また、各マスコミの報道と実際の裁判の進行とは微妙なずれがある場合も珍しくないで、十分な注意が必要である。」という意見をいただいた。一つの卓見と考えている。

しかし、この事件の加害者の長期にわたる引きこもり症状を伴うアスペルガー症候群という、とりわけ社会や他者との接点が著しく乏しいという特性から、前述の判決理由の「④十分な反省に至っていないこと」については判断には疑問があるのではないだろうか。法廷における被告人の答弁から、裁判官や裁判員の心証がそのようなものであったということはそのまま事実であるとしても、次の様な問題はどうか。そもそも法廷という極めて特殊で複雑な状況場面に適応した言動で被告人が対処していたといえるだろうか。また、それ以前に検察官による取り調べ状況において検察官の取り調べに、問われている内容の理解や回答の及ぼす結果について理解して応じていたかどうか、またそれ以前にこの事件の被疑者から事件の動機や実際に起きた出来事を適切に聞き出すことができたのだろうか。また、国選弁護人（奈良県自閉症協会、2012）による接見にしても、限られた期間で被告人との信頼関係を気づき、必要な事実関係や意思を十分に引き出せたかどうか。それ以前に、自分の行った行為についての理解や法廷での立場といったものに、被告人が十分な理解があったといえるのか、十分問われるべきだろう。少なくとも、内実は反省をしていなくても、罪を軽

くするために、弁護人の助言により決まり切った反省の情を定型的な言葉で表限したり、そもそも嘘をついたり人をだますことを何とも思っていないような別のタイプ、後述する狡猾なサイコパス psychopath⁴⁾の犯罪者のように量刑を軽くするために深い反省をしているふりをするといった、器用なマネは、自閉症スペクトラム障害の犯罪者に可能かといえば、およそ困難であろうと答えるしかないだろう。

いずれにせよ、この痛ましい事件は、発達障害についての早期診断・早期対応、二次障害の予防、発達障害についての十分な社会的理解と支援体制の確立という問題に多くの教訓を投げかけているように考えられる。

補足：自閉症スペクトラム障害・アスペルガー症候群を巡る最近の諸研究

アスペルガー症候群に限らず、自閉症スペクトラム障害の特徴を有する人にほぼ共通している特性として、複雑な社会的状況を理解して、適切な対応を行うことが極めて困難である。相手の気持ちを表情等の手がかりから推察し、相手の意図や気持ちに合わせた適切な言動をとることは、ある程度社会的適応の良好な、いわゆる診断除外例（医学的に治療を要しないために診断もしない事例）の場合でも大きな困難を伴うことである。また、コミュニケーションでの障害も大きい。このコミュニケーション上の障害については、顔の表情が乏しいとか目線が合わない、あるいは他人の顔の表情等の手がかりから気持ちを読み取れないといった、非言語的なコミュニケーションの側面については、比較的気づきやすいものであるが、言語的コミュニケーションについてはしばしば、このコミュニケーションの障害という側面の理解が見逃されている。成人のアスペルガー症候群の場合、言語的能力（知能）に障害がないことが診断の前提となっていることは周知の事実であるが、言語的能力に障害がないあるいは特に言語的能力の高いアスペルガー症候群についても、しばしばこの問題は深刻である。

言語的なコミュニケーションにおける障害の本質を言い当てた概念として、大井（2006, 2010）が提案している語用障害としての自閉症スペクトラム障害というとらえ方が注目されている。アスペルガー症候群といった知的障害のない自閉症スペクトラム障害の子どもの中には、その年齢の子どもが使用するとは思えないような難しい語彙を使用して周囲を驚かせるような子どもであっても、その使用法がどこかおかしい。その場合、多くは子どもの場合、背伸びをして難しい言葉を使用しているからだと寛大に受け取られるために見逃されやすいが、実はその難しい言葉だけではなく、ごく日常的な言葉の使用においてもどこか使い方がおかしい。特に言葉の感情的意味の理解が乏しいので、悪げなく相手を怒らせる言葉を使用したり、言葉の意味の取り違えで相手の言葉を相手の意図とはかけ離れた理解をしたりと、ボタンの掛け違いは珍しくない。言葉の表現がどこかおかしいというだけでなく、相手の言葉の理解がど

こか微妙にずれている。とりわけ、文脈依存言語の代表的言語ともいわれる（Hall, 1976/1979）日本語と日本人の言語コミュニケーション習慣においては、なおコミュニケーションの障害が複雑化し、より困難度を高めている可能性は高いだろう。逆説・比喩・婉曲・間接・曖昧表現等が複雑に混在し、相手に対する予備知識や微妙な手がかりから相手の気持ちを相互的に推察することが基本の日本人のコミュニケーションの特徴からは、なお厳しい困難を生じている可能性は否定できないところではないだろうか。

次に、イギリスを代表する自閉症スペクトラム障害の研究者の一人 Baron-Cohen (2011) が出版した “The science of evil: on empathy and the origins of cruelty（悪の科学：共感性と残虐性の起源）” という、タイトルだけは大変恐ろしい出版物について触れる。これは、一見自閉症スペクトラム障害とどうかかわる内容かというタイトルの本であるが、実はそうではない。Baron-Cohen の心のメカニズムとして提案している、Empathy Mechanism 共感メカニズムと Systemizing Mechanism システム構築メカニズムの2つの心のメカニズムのモデルから、自閉症スペクトラム障害の本質や治療指針を説明するとともに、ナチスドイツの非人間的な犯罪行為や冷酷な行為、一部のパーソナリティ障害を説明しようとする理論構築の試みである。特に近年急速に研究が進展している自閉症スペクトラム障害やパーソナリティ障害の脳生理学的研究を踏まえた壮大な科学的理論が提案されている。共感メカニズムとシステム構築メカニズムは、男脳女脳とも対応するもので、女性は共感的・情緒的なものごとの理解に優れる一方、男性は数理的・科学的なものごとの理解に優れている。自閉症スペクトラム障害、とりわけアスペルガー症候群の人が、共感的理解を必要とする対人的場面等では大きな障害を持つ一方、数値計算やカレンダー記憶やコンピュータ・プログラミングといった領域で特異な能力を示す場合があるが、それはこの共感メカニズムの障害とシステム構築メカニズムの卓越という考え方で説明できる。

また、すでに Baron-Cohen, Richler, Bisarya, Gurunathan, & Wheelwright (2003), Baron-Cohen, & Wheelwright (2004) は、この共感メカニズムを測定する EQ (Empathy Quotient) 尺度とシステム構築メカニズムを測定する SQ (Systemizing Quotient) 尺度を開発し、それによる研究データの集積が進んでいる。また、若林・パロン・コーエン・ウィールライト (2006) によりそれらの日本語版が翻訳され、それらの日本語版尺度で、男女の性差と文系・理系学生間の差が検討されている。日本の大学生でも、女性の方が EQ 尺度の得点が高く、男性の方が SQ 尺度の得点が高い。大学の文系・理系学部の比較では、文系の学生が EQ 尺度の得点が高く、理系の学生の方が SQ 尺度の得点が高い。また、EQ 尺度の得点では、学部の系統と性別には相互作用があり、文系では男女間に統計的な有意差があるが、理系では有意差がない。一方、SQ 尺度では、文系・理系のいずれの学部でも男性の方が女性より得点が高かった。

さて、再び Baron-Cohen (2011) の理論に話を戻す。この共感メカニズムの水準を、レベル 0 からレベル 6 までの水準に分けて、実際の例を示しながら、その水準につい

て理論的説明を示している。レベル 5 が、普通の健全な人たちで、レベル 6 は共感的能力が特に高い人を示す。以下、数値が小さくなるに従い、共感的能力の水準が低下していく。この本の最大の関心事項は、レベル 0 の人たちのことである。レベル 0 の人は、他者に冷酷であり、刑務所に収容されている殺人・暴行等の凶悪犯罪者が典型的である。他者に危害を加える可能性もある。他者の気持ちを理解できないので、反省や罪の意識がない。

Baron-Cohen は、さらにレベル 0 を、Zero-Negative 0-ネガティブ (0-と表記) と Zero-Positive 0-ポジティブ (0+と表記) に分けて、論じている。0-ネガティブとして、サイコパス Psychopath (Type P), 境界性 Borderline (Type B), 自己愛 Narcissist (Type N) を挙げているが、それぞれ American Psychiatric Association (2000) の診断基準 DSM-IV-TR のパーソナリティ障害のうち B 群パーソナリティ障害に属する、反社会性パーソナリティ障害・境界性パーソナリティ障害・自己愛性パーソナリティ障害に相当するといわれる。Baron-Cohen は、これらのパーソナリティ障害は、幼少時の子ども被虐待といったストレスが脳の共感性回路 (Empathy Circuit) の健全な形成を損なったものと見ている。

サイコパスについては、高橋 (1999), Hare (1993/2000), Kiehl & Buckholtz (2010/2013) が詳しい。このうち、Kiehl & Buckholtz は、反社会性パーソナリティ障害とサイコパスとの等価な関係を否定し、反社会性パーソナリティ障害のうちサイコパスと診断されるのは、そのうちの約 1/5 である。また、脳の傍辺縁系部位 paralimbic areas に不十分な発達状態があると指摘している。

Baron-Cohen は、一方、0-ポジティブの例として、アスペルガー症候群を挙げている。アスペルガー症候群は、共感システムの機能に大きな障害があるにしても、システム構築メカニズムの機能が優れているので、この機能により共感システムの障害の一部による社会的適応の妨げを補償したり、感情・情緒的な理解や共感的能力が仕事に妨げとなったりする場合、共感性が低いことが返ってプラスになる仕事があるからである。また、0-ネガティブのサイコパスとの決定的な差は道徳性にあるとしている。サイコパス (反社会性、異常な残虐性や暴力性といった犯罪傾向が強いパーソナリティ障害) は、他者への共感性が欠如し、おまけに道徳性も欠如している。一方、アスペルガー症候群は、他者への共感性に障害があるとしても、道徳性の形成がなされうるし、システム構造化の能力が高いので、感情的・共感的な理解が困難であっても、適切な治療や支援により頭で社会的・対人的なルールを理解し、社会的な適応が可能だということとして位置づけしようとしている。ただし、このあたりはまだラフなスケッチの理論モデルという印象も強い。

アスペルガー症候群の診断除外例：Glenn Gould

2012 年、クラシック音楽ファンの間で、カナダの伝説的な天才ピアニスト、Glenn

Gould グレン・グールド (1932～1982) の静かな回想ブームがあった。生誕 80 年、没後 30 年の年に当たったからである。グールドとその音楽については、グールド研究家の宮澤淳一氏による NHK の ETV 番組の講座「こだわり人物伝」等の TV 番組で (宮澤, 2009), 研究書 (宮澤, 2004), 翻訳書によっても日本ではよく知られている。20 世紀が生んだ最も個性的なピアニストの一人であったグールドの在世中の人気の秘密は、その卓越したピアノの技法と音楽性は勿論だが、数々の伝説的なエピソードに彩られた「孤高のピアニスト」ということでよく知られている。その伝説的なエピソードというのは、後にグールド伝説と呼ばれることになった数々の奇行と特異な言動で彩られたものであった。レパートリーは、J. S. Bach を得意とし、爆発的なヒットとなった 23 歳の時のレコード・デビュー曲は、Bach の「ゴールドベルク変奏曲」だった。若いピアニストのデビュー曲としては大変地味なこの選曲は、当然コロンビアレコードのディレクターの反対にあったが、それでもグールドは譲らず、その曲でのレコード発売となった。予想に反して爆発的な売れ行きとなった。Bach とともに、Schoenberg といった現代曲が得意なレパートリーで、このちぐはぐさがまさにグレン・グールドであった。

また、10 歳の頃に父親がグールドのために制作した低い折り畳椅子にこだわり、生涯持ち歩いて使用する専用椅子となったというエピソードも、また季節を問わずいつも同じコートとマフラー・ハンティング帽というグールドのおなじみのスタイルも、いつも大量の精神安定剤とミネラルウォーターを持ち歩いたことも、アスペルガー症候群特有のこだわりと考えてよい。

グールド特有の演奏スタイルは、前屈みの姿勢で、演奏中指をピアノの鍵盤上に走らせながら、メロディーを口ずさんだりハミングをしたり、空いた手で指揮をとったりする。まさに、他人が眼中にない自分だけの世界に浸った演奏スタイルだった。

グールドについて、もっとも信頼の高い資料は、グールドと 25 年間にわたった交流のあった精神科医の Ostwald (1997/2000) が書き残した「グレン・グールド伝」である。Ostwald の死の翌年未亡人によって出版されたその遺稿も、宮澤によって翻訳されている。グールドについて、アスペルガー症候群の可能性を疑った最初の記述は、次のような記述である。

「これが正確な回想だとすれば、別の疑問が生じる。すでに四十歳を超えていた女性が生んだ第一子は、幼少のときから何らかの異常な行動を示した可能性はないのか。泣かないというのは明らかに異常である。また、手のひらをひらひらさせる動きは、言語の発達における異常と関連しており、幼児自閉症と呼ばれる発達障害を示唆する。もっとも、彼が自閉的であったなら、公的な活動におけるあの目覚ましい成功はなかったはずだ。しかし彼が後に公表した児童期や青年期の行動のいくつか－特定の物体に対する著しい恐怖心、他人への共感の欠如、引っ込み思案、孤立を好む傾向、儀式行為への強迫的な執着－は、アスペルガー症候群と呼ばれる自閉症の一種によく似ている。(宮澤訳, pp. 32-34)」

Bach を得意とした孤高のピアニストというのは、通常は並外れた高度な精神性をさすが、グールドの場合、演奏会活動も停止し弟子もとらず、トロント郊外の湖畔の別荘で一人で社会からほとんど隔絶した環境で生活し、ラジオあるいはレコードといったメディアを通して一方的な形で社会との接点を残した孤独をいう意味を含んでいる。この特徴は、まさに成人のアスペルガー症候群の特徴といえるものである。演奏会活動を中止する大きなきっかけとなったのは、30歳の時のアメリカの音楽会の大御所 L. Bernstein 指揮のニューヨークフィルハーモニーとの共演で、J. Brahms ピアノ協奏曲第1番の演奏テンポを巡り Bernstein と対立し、酷評された事件である。グールドには、音楽の演奏家に不可欠な社会性や協調性が欠けていた。その事件の2年後、グールドは演奏会活動から引退した。32歳の時だった。以後は、20世紀のニューメディア、レコーディングやラジオ番組・テレビ番組といったメディアを介してのみ、グールドと社会との接点が維持された。

また、20世紀の中頃の Bach 演奏の正統は、チェンバロといったその時代に使われていた古楽器による復元演奏が主流となりつつあった。そのような音楽界の潮流には背を向け、自分だけのピアノによる Bach 音楽の世界を構築し、それが十分成功した。現代のピアノによる Bach 演奏の基本的なスタイルを作ったのはまさにグールドともいえるが、こうした必ずしも社会全体や時代風潮に染まらず独自の活動世界を作り上げたのは、アスペルガー症候群の天才の特徴を十分に備えたグールドだからこそなしたものと考えることができる。

その後、グールドをアスペルガー症候群の天才の一人と位置づけたのは、James (2006) であった。奇行というエピソードの枚挙のいとまないグールドの場合、成人のアスペルガー症候群の特性を十分に有しているといえる。ただし、杉山 (2009) が指摘したように、グールドはアスペルガー症候群としての特性を有しているが、その特性を維持しながら、職業的生活や社会生活を全うできたのであるから、診断除外例であるという見解も十分な妥当性があるようにも思われる。

■脚注

- 1) 毎日新聞 2012 年 7 月 31 日朝刊 25 面記事「社会に受け皿なく再犯の恐れ」 求刑超す懲役 20 年
読売新聞 2012 年 7 月 31 日朝刊 31 面記事 姉殺害求刑越え懲役 20 年 大阪地裁判決「再犯の恐れ強く心配」
朝日新聞夕刊 2012 年 7 月 31 日付 10 面記事「発達障害再犯の恐れ」 求刑超す懲役 20 年
- 2) 判決要旨は、裁判所がマスコミや関係者に配布するもので、この裁判の判決要旨は奈良県自閉症協会 NEWS きずな 2012 年 8 月号などに部分掲載されている。
- 3) 2012 年 8 月 25 日及び 2013 年 1 月 4 日の口頭意見。個人の意向により、匿名とする。
- 4) DSM-V-TR のパーソナリティ障害とは、別のパーソナリティ障害の診断概念であり、とりわけ、猟奇的・冷酷な連続殺人事件の犯人あるいは言葉巧みに人をたぶらかし食いものにする詐欺師などについて英米の精神鑑定で用いられる診断概念である。

■引用文献

American Psychiatric Association. (2000) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fourth ed.*,

- Text Revision; DSM-IV-TR*. Washington, D.C. : American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染矢俊之訳 2008 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Baron-Cohen, S. (2011) *The science of evil: on empathy and the origins of cruelty*. New York: Basic Book.
- Baron-Cohen, S., Richler, J., Bisarya, D., Guranathan, N., & Wheelwright, S. (2003) The Systemizing Quotient (SQ): an investigation of adults with Asperger syndrome or high-functional autism and normal sex differences. *Philosophical Transactions of the Royal Society*, **358**, 361-374.
- Baron-Cohen, S., & Wheelwright, S. (2004) The Empathy Quotient: an investigation of adult with Asperger syndrome or high-functioning autism and normal sex differences. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **34**, 163-175.
- 藤川洋子 (2010) 非行と広汎性発達障害 日本評論社
- Hall, E.T. (1976) *Beyond culture*. New York: Doubleday (岩田慶治・谷 泰訳 1979 文化を超えて TBS ブリタニカ)
- Hare, R.D. (1993) *Without conscience: the disturbing world of the psychopaths among us*. New York : Pocket Books. (小林宏明訳 2000 診断名サイコパス—身近にひそむ異常人格者たち— 早川書房)
- James, I. (2006) *Asperger's syndrome and high achievement: some very remarkable people*. London, UK : Jessica Kingsley. (草薙ゆり訳 2007 アスペルガーの偉人たち スペクトラム出版社)
- Kiehl, K.A. & Buckholz, J.W. (2010) Inside the mind of a psychopath. *Scientific American Mind*, **September/October 2010**, 22-29. (日経サイエンス編集部訳 2013 サイコパスの脳を覗く 日経サイエンス, **2013(02)**, 32-40.)
- 大井 学 (2006) 高機能広汎性発達障害にともなう語用障害：特徴, 背景 コミュニケーション障害学, **23**, 87-104.
- 大井 学 (2010) 高機能自閉症スペクトラム障害の語用障害と補償—伝え合えない悲しみと共生の作法— 子どものこころと脳の発達, **1**, 19-32.
- Ostwald, P.E. (1997) *Glenn Gould: the ecstasy and tragedy of genius*. New York & London: W.W. Norton. (宮澤淳一訳 2000 グレン・グールド伝—天才の悲劇とエクスタシー— 筑摩書房)
- 高橋紳吾 (1999) サイコパスという名の怖い人々 河出書房新社
- 宮川充司 (2011 a) 青年期以降の発達障害：二次障害とパーソナリティ障害 相山女学園大学教育学部紀要, **4**, 103-109.
- 宮川充司 (2011 b) わかりにくい青年期以降の発達障害—パーソナリティ障害との狭間で— 相山女学園大学学生相談室活動報告, **6**, 5-8.
- 宮川充司 (2012) 青年期から成人期にかけての発達障害とパーソナリティ障害—重ね着症候群とアスペルガー障害— 相山女学園大学教育学部紀要, **5**, 107-114.
- 宮澤淳一 (2004) グレン・グールド論 春秋社
- 宮澤淳一 (2009) グレン・グールド—鍵盤のエクスタシー— NHK 知る楽こだわり人物伝 日本放送出版 pp. 5-86.
- 奈良県自閉症協会 (2012) 障害は罪なのか きずな, 171, 1-12.
- 杉山登志郎 (2007) 子ども虐待という第四の発達障害 学習研究社
- 杉山登志郎 (2009) 発達障害から発達の凸凹へ 杉山登志郎・岡 南・小倉正義 ギフテッド・天才の育て方 学研 pp. 7-25
- 高岡 健 (2009) 発達障害は少年事件を引き起こさない—「関係の貧困」と「個人責任化」のゆくえ 明石書店
- 若林明雄・サイモン バロン・コーエン・サリー ウィールライト (2006) Empathizing-Systemizing モデルによる性差の検討—Empathizing 指数 (EQ) と Systemizing 指数 (SQ) による個人差の測定 心理学研究, **77**, 271-277.

■引用 web sites

日本弁護士連合会 [http : //www.nichibenren.or.jp/activity/document/statement/year/2012/120810_3.html](http://www.nichibenren.or.jp/activity/document/statement/year/2012/120810_3.html) (2012 年 11 月 1 日アクセス)

日本発達障害ネットワーク [http : //jddnet.jp](http://jddnet.jp) (2012 年 11 月 1 日アクセス)

日本自閉症協会 [http : //www.autism.or.jp](http://www.autism.or.jp) (2012 年 8 月 30 日アクセス)

移り気な児童精神科医のブログ [http : //www.afcp.jp/entry/2012/08/10/215300](http://www.afcp.jp/entry/2012/08/10/215300) (2012 年 11 月 1 日アクセス)